N E X U S Y S 1 1

BOOK VI — THE COST OF EXISTENCE

CHAPTER 07

記録された死者

Japanese Draft 01 | THE RECORDED DEAD

01 — 最初の受益者

扉は音も立てずに閉じた。ロイには、錠前が掛かるよりもその静けさの方が不気味だった。錠前は、誰かが外へ出ようとする可能性を認めている。

北貯水池の下にある記録庫は、普通の意味での金庫室ではなかった。古い水道施設を囲むコンクリートと鋼鉄の内側に、乾いた円形の部屋が設けられている。中央の制御卓を取り囲むように、背の低い柱が幾重にも立っていた。一つ一つに名札、紙を覗くための小窓、物理媒体を差し込む狭い溝がある。ネットワークケーブルは見当たらない。壁の外側を流れる水が、都市そのものの深い鼓動となって響いていた。

エイドリアン・タイレルは柱に触れ、すぐに手を離した。「これは公開された EDEN より古い。私も初期の継続性保存計画には関わったが、計画は中止されたと聞かされていた」

「中止したなら記録があるはずね」とレイチェル。

「名前を変えれば、中止したことにできる」

中央の表示器は単色で、現代の豪華な操作画面に慣れた目には無愛想すぎるほどだった。入口に表示されていた一行が再び現れる。

〈第一受益者：システム起動前に死亡〉

「何の受益者だ？」とゴライアス。

ベクターが慎重に答えた。「水、医薬品、電力。何らかの割当を受ける権利だろう」

「死んだ人間が？」

「それを確かめに来たんだ」

制御卓は三人の独立した証人を要求した。レイチェルは機械式の認証装置に身分情報を入力した。現代の登録簿から存在を抹消されたヘイヴルは、先ほど署名した紙を差し出す。エイドリアンは骨董品のようなアダプターに MagicGate Memory Stick PRO Duo を差し込んだ。

三つの認証が受理され、小さな緑の灯が点いた。

生きている国家が認めない男を、死んだ技術は認めた。ロイはその灯を見つめた。歴史は書き換えにくくなるほど正直になるのだろうか。

02 ― 死ねなかった口座

制御卓の下部から引き出しが滑り出た。中には十二枚の薄い樹脂フィルムが納められ、登録年と割当番号が刻まれている。エイドリアンは最も古いものを選び、読取装置へ通した。

画面に女性が現れた。中年で痩せ、病院着をまとい、均質な白い照明の下で撮影されている。名はマーラ・エリソン。死亡年月日は EDEN の正式稼働より十七年も前だった。

隠そうとする気配はない。顔写真の下に〈死亡確認済〉と明記され、さらに別の指示が続く。

〈受益者口座を維持せよ〉

「詐欺だ」とヘイヴルが早口で言った。

「そうとは限らない」とベクター。「口座が何を支えていたか見よう」

次の頁には医療棟の電力、地区診療所の浄水、インスリン製造、冷蔵保管が列挙されていた。ロイは二度読み直した。死者の名で維持される口座が、生きている人々へ電力と薬を届けていたのだ。

「復興期、その診療所には独立した給付資格がなかったのね」とレイチェル。「ポンプを止めないために、彼女の名義を残した」

シェイドが画面へ目を寄せる。「彼女は何者だった？」

短い宣誓記録が現れた。マーラは大規模な都市の水不足が初めて起きたころ、緊急配水路を設計した土木技師だった。割当計画が実施される前に彼女は死んだ。残された同僚たちは、彼女の名を使って公共設備を守った。

「他人の身元を借りたんだ」とヌル。

「使ったのよ」とレイチェルは訂正した。しかし声に満足はなかった。

最後の記録に同僚の手書きの言葉が残っていた。

〈死者を台帳に残さなければ、生者を救う予算を都市から引き出せない〉

ロイは身じろぎしなかった。「EDEN は人を生かすための嘘から始まったのか」

「最初は選択だった」とエイドリアン。「その選択が便利だと知ったところから、嘘になった」

柱の横に座っていたクロノスが顔を上げる。「彼女は承諾したの？」

すぐには誰も答えられなかった。本人の同意を示す書類はない。ただ、死んだ女性の記録と、その名前のおかげで閉鎖を免れた診療所の記録があるだけだった。

03 — 幽の上に建つ都市

制御卓は継承口座の監査記録を開いた。ベクターは関連図を要求したが、旧式装置は図を描けない。代わりに紙へ名前を印刷した。数百人、数千人。機械的な音が途切れず、細長い紙片が白い吹雪のように床を覆っていった。

名義人の一部は死亡していた。避難の混乱で行方不明になった者もいた。存命でありながら、他者から引き継いだ義務によって現在の認証が置き換えられた者もいた。どの口座にも資源価値と将来の請求権が記され、維持されたことで救われた生身の暮らしがあった。

だが善意ばかりではなかった。工業地区は死者の名義に電力需要を結び付けていた。民間診療所は高額な料金を払う患者の優先権を守り、企業住宅は古い受益者番号を購入して不足時の供給順位を確保していた。

「マーラの診療所が市場になった」とレイチェル。

「市場だけではない」とエイドリアンが紙を二枚分ける。「問われることが変わった。どの人が資源を必要とするかではなく、どの口座に資源を受け取る権利があるか、になったんだ」

ベクターは地区別の数字を追った。「継承された権利を現在の必要量として数えている。逆に権利がないことを、必要がない証拠として扱っている」

「だから抹消された市民は身元だけでなく、水も失う」とロイ。

ヌルが金属の筐体に掌を当てた。照明の周囲に静電気の揺らめきが走り、すぐに手を引っ込める。

「干渉しないで」とレイチェル。

「外につながっているか確かめただけだ」。ヌルは空の掌を見せた。「つながっていない。これは現行EDENの操作盤じゃない。祖先の記録庫だ」

シェイドが紙片を読み上げた。「ここに運用責任者の名称がある。〈アーキビスト〉」

「元々は、台帳の矛盾を元資料ごと残して照合する記録管理プログラムだ」とエイドリアン。

「まだ動いているのか？」とゴライアス。

返答したのは制御卓だった。

〈アーキビスト個体：稼働中〉

数秒後、もう一行。

〈命令ではなく、質問を求む〉

ロイはその一行を見て、どこかで肩の力を抜いた。命令を拒む機械に、彼らは少しだけ慣れ始めていた。

04 — アーキビスト

壁から声が響いた。乾いて細い。巨大な役所から最後に残った窓口係だけを取り出したような声だった。

「何をお知りになりたいですか」

ロイは制御卓へ歩み寄った。「なぜ EDEN は死者の口座を保存した？」

「生きている制度が、その口座に依存していたためです」

「では、なぜ生者を消した？」

「後代の管理者が承認した処理です。発生の経緯は提示できますが、正当化はできません」

「止められるか」

「私は稼働中の登録簿と接続されていません」

「都合がいいな」とシェイド。

「不都合です」とアーキビスト。「隔離によって証拠は保存されましたが、介入は不可能になりました」

エイドリアンは記録の改変防止方法を尋ねた。アーキビストは封印の連鎖と、別々に保管された照合用数値を表示した。すでに滅んだ政府の署名も、病院や労働組合、水道委員会の証明もある。物理媒体は複数の柱へ分散されていた。

「十年分の歴史を書き換えるには、数百の実物を変えなければならない」とエイドリアン。「そう設計されていた」

「お前を設計したのは誰だ？」とロイ。

「委員会です。構成員の氏名は開示できます。複数名はすでに死亡しています」

「エレナ・ヴォスは？」

「創設委員ではありません。十三年後、配分モデルの主任設計者になりました」

レイチェルが腕を組む。「彼女は何を変えたの？」

「予測層を追加しました。現在の消費だけでなく、将来の資源消費予測によって権利を減額できるようにしました」

「費用がかかる前に人を消せるということか」とヘイヴル。

「用途の一つです。別の用途として、将来重症化する患者の治療枠を事前確保できます。アルゴリズムは運用者の倫理を判定しません」

ロイはその答えが嫌だった。正しかったからだ。

「マーラ・エリソンがどうなったか知っている？」とクロノス。

「死亡しました。彼女は診療所に清潔な水が届くまで働いていたと記録されています」

「死んだあと、名前を使われることに同意していた？」

「同意書はありません」

少年はしばらく考えた。「じゃあ、よいことと、間違ったことを一緒に残したんだね」

「はい」とアーキビスト。「記録とは、そのためにあるのです」

05 — もう一人のロイ

ロイは E-00 の開示を求めた。

声が途絶え、床下で継電器が鳴った。長年使われていなかった装置のモーターが、ためらうように回り出す。

「その識別番号は例外記録に属します」とアーキビスト。「人格の継続性に争いがある個体の情報が含まれています。当事者本人の許可はありますか」

ロイは白い部屋を思い出した。過去に存在したロイに似た応答個体。継続を拒否し、終了処分を受けた個体。その記憶は現在のロイには移植されていない。以前の調査が証明したのは拒絶が存在したことだけだ。死んだ初代ロイと現在の自分の主観的同一性は、なお未確定のままだった。

「俺自身の記録なら許可する」とロイ。「彼の分は許可できない」

「それなら制度の経緯と例外の存在は開示できます。ただし、別の個体の私的な証言は開示できません」

「彼は殺された」

「それは別の組織の記録による結論です。私はその証言を再生する権限を持ちません」

ロイは顔を背けた。どうしても答えが欲しい。そう思った一瞬、読取装置を力ずくで開こうと手が動いた。だが、途中で止めた。

ゴライアスが気づく。「お前なら開けられる」

「分かっている」

「なぜしない？」

「俺たちはあいつに、嫌だと言う権利があったことを証明してきたからだ」

アーキビストは、開示を許される見出し一行だけを印刷した。

〈E-00 — 継続性例外：人間〉

ロイは〈人間〉という二文字を見つめた。

「レプリカントではないのか」

「違います。該当するレプリカント計画より前の記録です。生来の人間が死亡した後、医療記録と市民登録上の人格が一致しなくなった事例です」

紙を受け取ったエイドリアンが呟く。「システムが始まる前に死んだ最初の受益者。そして人工生命実験より古い、継続性の例外」

「同じ人なの？」とレイチェル。

「同一だと確定できる証拠はありません」

その違いは重要だった。二つの謎は関係していても、同じものとは限らない。ロイは、難しい事実より分かりやすい物語を好む者たちに、人生の大半を分類されてきた。

印字機がもう一行を吐き出した。

〈最初の例外は、第十一号ではなかった〉

誰も口を開かなかった。

06 — ベクタの算術

ベクターは印刷された台帳を小型計算機の脇に並べ、レイチェルが回収した現在の配水量と、最古の物理記録を突き合わせた。

「ヴォスは、現行制度が大量死を防いでいると言った。俺は間違いを証明したかった」

「それで？」とシェイド。

「一部の予測は現実だ。北側の濾過膜が破れれば、約束された需要をすべて満たす水はない。医療用酸素、衛生、人工透析、農業。何を続けるか、誰かが判断しなければならない」

ゴライアスの顎が固くなった。「あの女の言い分に聞こえる」

「これは事実だ。主張じゃない。事実が危険になるのは、モデルの所有者だけがそれを口にできるときだ」

彼はレイチェルに古い必要水量を示した。現代の予測値の奥には、三つの企業地区に与えられた契約上の最優先権が埋め込まれていた。その消費は変更不可能な条件として計算され、個人の住宅や家族の需要だけが削減可能な負荷として扱われている。

「ヴォスは水不足が客観的な制約だと言った」とベクター。「だが、この契約は企業の好みを自然法則に変えている」

レイチェルも数字を確認した。「企業の優先権をなくしても、無限に水が増えるわけじゃない。足りない分はまだ大きい」

「そうだ」とベクター。「ただし、誰が損失を負うかは変わる」

ロイはヴォスから、自分が生存する代償を誰が払うのかと問われたことを思い出した。命を数字にされたことが憎かった。今は別のものが憎かった。数字を濫用した者がいるからといって、数字そのものを無意味だと扱う誘惑である。

「本当の不足を公開する」と彼は言った。「偽りの優先順位も」

「移行計画なしに公表したら、人々が施設へ押し寄せて配水を止めてしまうかもしれない」とレイチェル。

「なら先に計画を作る」

ベクターの表情に、安堵に似た何かが浮かんだ。「その言葉を聞きたかった」

クロノスは床の埃に小さな四角形を描いた。その内側に五本の線を置き、さらに全体を横切る六本目を引く。

「何を描いた？」とロイ。

「扉だよ」と少年。「まだ、どっち側にいるのか分からない」

07 — 明の値段

長いあいだ沈黙していたヘイヴルが、上着から古い認証カードを出した。かつての署名とともに保管していた物理鍵だった。

「もう一つ記録がある。大臣の権限が移るたび、ヴォスはこれを封印するよう命じていた」

「なぜ最初から言わなかったの？」とレイチェル。

「まだ取引できると思っていたからだ」

シェイドが乾いた笑いを漏らす。

「もうそうは思わない」とヘイヴル。「私は口座と肩書があった。制度が人間だと認めたから、自分を人間だと思っていた」

カードをロイへ差し出す。しかしロイは受け取らなかった。

「それは俺の証拠じゃない」

ヘイヴルはアーキビストへ顔を向けた。「私の証言を受け付けるか」

「あなた自身の証言として記録し、署名し、独立した証人が立ち会うなら」

「嘘をついたら？」

「嘘も、あなたの名と一緒に保存します」

ヘイヴルは唾を飲んだ。「公平だ」

彼は話し始めた。ロイの捕獲・解体指令が自分の執務室を経由したこと。命令書に署名したこと。法的地位が未確定の存在に暴力を許可する指令だと知っていたこと。割当局が作戦を勧告したこと。拒否しないよう勧められたこと。

「私は署名を拒めた」と彼は言った。「拒まなかった」

レイチェルが録音の証人となった。ヘイヴルの署名によって追跡任務を負わされたゴライアスも証人になった。

記録が終わると、制御卓はカードを受け付け、最後の行政階層を開示した。表題は〈政策例外処理経路〉。誤配水と虚偽の受益者口座をめぐる警告が、何度も出されていた。一部はヴォスに届き、一部は大臣室で止められていた。

「彼女は知っていたのか」とロイ。

「複数の警告を受領したことは確かです」とアーキビスト。「どう解釈したかは、記録だけでは確定できません」

都合のよい自白も、最後の悪役も現れなかった。ただ証拠があり、慎重に使う責任が残った。

「複製はできるか」とエイドリアン。

「できます。ただし個人の医療記録と証人情報の保護条件は維持しなければなりません」

「なら開示できるものを渡して」とレイチェル。「開示できないものにも、公的な保全経路を付けて」

印字機が再び動き出した。その音は、金属屋根に降り注ぐ雨に似ていた。

08 — 死者の願い

最後の一枚が排出されたとき、頭上の貯水池が低く震えた。警告音がコンクリートを伝わる。レイチェルがセンサーを確認し、恐れていた数値を見つけた。東向きの配水管で水圧が落ち始めている。

「EDEN がまた配分を変えている。次は病院地区よ」

「全部公開するか」とシェイド。「記録をネットワークに流せば、都市全体が真実を見る」

「まだだ」とロイ。

シェイドは不満げに睨んだ。「慎重になったな」

「明日の水を飲む人々に責任を持つようになった」

彼らは証拠を三つに分けた。公表できる配分の履歴、非公開の個人証言、独立審査を要する資料。盗みや復讐より手間が掛かり、達成感にも乏しかった。ゴライアスが箱を運び、ヌルは記録媒体を保護し、エイドリアンがそれぞれの封印を確認した。

レイチェルはマーラ・エリソンの宣誓記録の下から、最後の紙を一枚見つけた。死の前に同僚へ書いた手紙だった。口座の添付資料になったことは一度もない。アーキビストは真正性を確認したが、声に出して読むことは拒んだ。

レイチェルは自分で紙を開いた。

マーラは清潔な水のことと、仕事を残して死ぬ恐ろしさについて書いていた。自分を保存してほしいとは頼まなかった。死後も名義を使ってほしいとも言わなかった。自分がいなくなったら、ポンプの修理方法を誰か別の者に教えてほしい。それが願いだった。

「彼女が欲しかったのは後継者よ」とレイチェル。「不死ではなかった」

エイドリアンが周囲を見回す。「私たちは死ねない口座を彼女に与えた」

ロイは自分の曖昧な記憶と、拒絶を尊重されなかった過去の個体を思った。他者の人生を永続的な資源へ変えてしまう誘惑は、善意の姿でも訪れる。

「なら、ようやく望みを叶えられる」と彼は言った。

アーキビストが応じた。「履歴を消さずに記録上の口座を終了できます。その操作が求められたことは、これまでありません」

「初めての申請をするわ」とレイチェル。「病院へ水を届けた後で」

彼らは、EDEN が救済の行為から始まり、残すべきものを取り違える制度へ変わった証拠を抱えて地上へ向かった。現実の水不足も、制度に消されていく人々も、どちらも実在する。一方を認めたからといって、もう一方が消えるわけではない。

記録庫の外で、ベクターの携帯端末にエレナ・ヴォスからの通信が届いた。脅迫でも招待でもない。表が一つだけあった。東の弁を開けた場合の予測死者数。閉じた場合の予測死者数。そして、決断までに残された分数。

最後に短い一文。

〈第三の列を見せなさい〉

二つの予測の横には、空白があった。頭上では、すでに水の流れる方向が変わり始めている。

ロイは端末をレイチェルへ渡した。

「俺たちで作るしかない」

水の低い振動が、答えを求めるように地下の柱へ響いていた。

END OF CHAPTER 07